

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | <書評>堀田あゆみ著 『交渉の民族誌 --モンゴル遊牧民のモノをめぐる情報戦』 勉誠出版、2018年、定価4,500円+税、400頁                |
| Author(s)   | 田中, 華子  |
| Citation    | コンタクト・ゾーン = Contact zone (2019), 11(2019): 486-494                                |
| Issue Date  | 2019-08-31  |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2433/244002">http://hdl.handle.net/2433/244002</a> |
| Right       |   |
| Type        | Departmental Bulletin Paper   |
| Textversion | publisher   |

堀田あゆみ著

## 『交渉の民族誌——モンゴル遊牧民のモノをめぐる情報戦』

勉強出版、2018 年、定価 4,500 円＋税、400 頁

田中華子\*

本書は、著者が 2015 年に総合研究大学院大学文化科学研究科に提出した博士学位論文〔堀田 2015〕と、既発表論文〔堀田 2012, 2016〕をもとに加筆・修正を加えたもので、従来「モノが少ない」と強調された結果「モノに執着しない」という幻想を持たれがちだったモンゴル遊牧民の「モノ」のやり取りに注目し、実際には彼らにとってモノがどのような存在なのかを実証的に描き出した民族誌である。実は、評者自身もそのような幻想に囚われてきたが、他方でフィールド経験からそのイメージに疑問を持つこともあった。また一ノ瀬恵も書いているが〔一ノ瀬 1991: 162-163〕、日本人の基準でみるとモンゴルの人々はモノの貸し借りを気軽に言い、所有が「移ろいやすい」と感じていた。

このように評者には漠然とした疑問のままだった課題を、生き活きとした事例の描写を通じて緻密に論じた研究が本書であり、場面を想像しつつ興味深く読んだ。

以下、本書の構成を示した後に、章ごとに内容を紹介し、評者のコメントを述べたい。本書の構成は以下の通り。

- 序 章 遊牧の民と遊動するモノ
- 第 1 章 モンゴル遊牧民の生活世界
- 第 2 章 遊牧民の生活世界にあるモノ
- 第 3 章 モノのやり取りに関する実践
- 第 4 章 モノの移動をめぐる交渉
- 第 5 章 モノの情報をめぐる交渉
- 終 章 交渉する遊牧社会

なお、巻末資料として「エンヘー家の生活世界にあるモノ目録」がある。調査対象の遊牧民家庭で行ったモノの悉皆調査により記録したすべてのモノ（1494 点におよぶ）の写真、資料番号、資料名、特徴、来歴などを目録にしたものである。

---

\*TANAKA Hanako 名城大学・非常勤講師

## 序章 遊牧の民と遊動するモノ

序章では、遊牧民及び遊牧の定義、モンゴル遊牧社会に関する先行研究とモノをめぐる先行研究をまとめ、本書の課題や視座、続いて本書の目的と構成について述べている。

著者によればモンゴル遊牧社会に関する先行研究のうち、物質文化研究は“どのようなモノが存在するのか”の提示にとどまり、それらの社会や人々の間での働きは不明であった<sup>1</sup>。そのため本書では現代遊牧社会において“どのようなモノが存在するのか”に加え、“どのように存在するのか”を丹念に描き出す必要があるという。さらに著者はモンゴルにおいて物質文化の転換期があり、遊牧民世帯にも携帯電話のようなかつてなかったモノ、プラスチック製の台所用品などの流入があることから、「モノと人間との相互作用」(チクセントミハイ [2009])により遊牧民の生活にも変化が起きており、現在の遊牧民を取り巻くモノの世界はこうした製品も含めて捉える必要があると指摘している。

モノをめぐる先行研究をまとめ、本書の視座を述べた部分では、文化人類学や民族学ではローカルな社会で作られるモノ自体への関心が主流だったが、1970年代後半以降に消費社会論が登場し、「商品」の枠組みでモノを捉えるようになったという。その流れで、モノは「商品化」状態と「個別化」状態の間を往還しているというコピトフの議論 [Kopytoff 1986: 69-70] があり、モノを動態的な観点で捉えるアプローチを著者は踏襲する。

本書の関心は、日常にあるモノを媒介にした人と人の関わりを明らかにすることにある。著者が対象とするのは「一定の時空間を占めていたはずのモノが所有者の意図に関わらず、簡単に移ろってしまう社会」(21頁：以下本書からの引用は数字のみを示す)であり、そのような社会、人々の間でモノは一体どのような存在なのかを解明することが本書の課題である。本書の最終的な目的は「モノが世帯を超えて移動するという現象を遊牧の社会的文脈から解明すること」(22)である。

## 1 モンゴル遊牧民の生活世界

本章では、第2章以降で展開する遊牧民の日常実践を理解する土台となる情報を提供する。

まず、モンゴル国が1921年の独立革命を経て社会主義国家として計画経済を進めてきた経緯と1990年の民主化・市場経済化以降の「ポスト社会主義期」の様々な変化、それらの遊牧民の生活への影響、遊牧民人口の変化とその背景について述べている。次に本書の依拠するデータを得た調査の実施時期や対象地域、方法、著者の住み込み調査を受け入れた遊牧民エンヘー家の居住するアルハンガイ県の地理と産業、同県ホント郡の概略、

1 ただし、「モノの移動」やその社会的役割に言及した研究が皆無という訳ではなく、風戸真理による銀製品の社会的・経済的価値に関する研究 [風戸 2010]、著者の博士論文以降ではあるが、同じく風戸によるゲルの部品交換や贈与などの「バイオグラフィー」の研究 [風戸 2016a, 2016b] などがある。

同郡サントの一家に関する基本的な情報、調査内容、期間などについて述べる。続いて市場経済と遊牧民がどのように接合しているかを明らかにするために、サントの遊牧民の経済活動について述べている。市場経済の浸透で、モンゴル遊牧民は市場の動向を見ながら世帯単位で自立的に生計を維持する必要がある、家長も最新の市場相場の把握や販売先・時期の判断などの努力が求められるという。

さらに遊牧生活の実際を、宿営地の選定や、一ヶ所とともに宿営する世帯（本書では「共営世帯」とする<sup>2)</sup>）同士の関係や役割、夏営地と冬営地での一日の過ごし方によって説明する。共営世帯は、牧畜労働を効率的に行うために家畜群を統合し、役割を分担するなどして協力しあうと同時に、互いにモノを融通しあうという役割を暗黙の裡に期待しているという。夏営地・冬営地の一日をみると、特に夏は家畜の搾乳や乳製品加工を中心とした牧畜労働が多く、多忙であると同時に近隣世帯や親戚世帯の出入りがあるなど人の往来も多い。このため、著者は夏営地での一日あたりの出入り人数とその目的を記録し、遊牧民が他家を訪問することの意義を、参与観察した内容と事例を通して考察した。

著者は、この他家への訪問とおしゃべりこそが、実は遊牧民の生活を支える最も重要な活動だと考えている。遊牧生活の中では植生の良い牧地や水利条件、獣害の状況、家畜や畜産品の市場価格など様々な情報が必要で、遊牧民はある種の「情報社会」に生きているともいえるとする。

## 2 遊牧民の生活世界にあるモノ

本章では、著者は現代の遊牧民の生活世界に存在するモノの内容、存在のありようと彼らにとってモノがどのような存在であるのかを明らかにしようとした。

著者はモンゴル遊牧民の物質文化の特徴として従来「モノの少なさ」が強調され、「物欲が少ない」という精神性に転換された結果「モノに執着しない」という解釈が生じたと考える。しかし、地理的に分散居住する遊牧民がモノに執着しない、モノが少ないとは本当なのか、本当ならどのように生活が維持されているのかという疑問をもった。そこで現代遊牧民の生活世界にあるモノの全容を詳らかにしようと考え、遊牧民世帯エンヘー家においてモノの悉皆調査を実施した。モノの種類、所在の記録、目録化に加え、モノの来歴について聞き取りを行い、モノの配置と空間利用の関係性について考察し、モノの語りに見られる特徴から、彼らがモノをどのように捉えているのかを分析した。

これにより、(1) 遊牧民は自家の生計を維持するのに十分なモノを持っているが、他家のモノが混在しているのが常態であること、(2) 彼らにとってモノは、所有により常に手元にある存在ではなく他者からの働きかけを受けて移動するもの（フロー）であり、同時

2 本書に詳しいが、多くの場合このような一ヶ所に共同で宿営する世帯は「ホト・アイル *khot ail*」というモンゴル語で呼ばれる。*khot* は家畜囲い、*ail* は世帯を表す。ところが、著者の調査地ではその呼称ではなく「ハムト・ボーサン・アイル（ともに宿営する世帯）*khamt buusan ail*」と呼ぶため、その訳語として「共営世帯」を充てている。一口にモンゴルといっても地方差があり、この「ホト・アイル」に相当する宿営集団の規模や呼称もそのような一例だと考えられる。

に自らの働きかけにより新たに取り込むことができるものでもあること、このようなモノの動態性・移動性の高さがモンゴル遊牧民のモノの特徴であることが明らかになった。

### 3 モノのやり取りに関する実践

本章では、著者はモンゴル遊牧民のモノのやり取りに関するルールと考え方、モノの移動を促す文化装置の存在と移動の不確実性を詳らかにしようとした。

まずエンヘー家を一方の当事者とする貸借の事例を通して、モノのやり取りの状況と相手について述べている。貸借の動機に注目すると、自然状況、家庭の事情、個人の事情など多様で自分のモノがあっても他家のモノを借用する事例もある。著者は貸借と譲渡の区別の曖昧さについて考察し、次のように述べる。モノの入手を語る際に用いる表現は、所有権の移転の有無を明示しない。区別を表す表現はあるが事実上言明されることはほとんどなく、所有者の状況や気持ち次第でどちらでもあり得、途中で変わることもある。これは、必要な時に必要なモノが利用できるか否かが重要なので、貸借か譲渡かを言明しないことで、モノを融通しやすくしていると考えられる。このようにモンゴル社会はモノの融通を是とする社会であり、正当な理由もなくモノを融通しない者は「どけち」(*kharamch*)と陰口をたたかれる。他者の要求を、理由をつけて断ることも可能だが、やむを得ない理由で要求に応えたくてもできないという状況を提示し、相手を納得させる必要がある。このように道徳観や占有に対する社会的圧力によってモノの移動が発生しやすい環境が作り出されているのだという。

さらに著者はやりとりの不確実性を考察し、借用失敗の状況を以下の3つに分類できるという。(1)所有者がモノを恒常的・瞬間的に持っていない場合、(2)持っているが貸す気がない場合、(3)タイミングが所有者の使用のタイミングと重なった場合である。借用の失敗からモノのやり取りを見ると、所有者の許可のないモノの処分は不可能、使用のタイミングが重なれば所有者優先など、所有権は明確である。しかし所有権を理由にモノの融通を妨げることは社会的批判の対象になるため、所有者はその立場を生かし(「ない」ことにするなど)モノの移動をコントロールしている実態があるのだという。

### 4 モノの移動をめぐる交渉

本章では、モノのやり取りに先立って行われる要求者と所有者双方の交渉実践に着目し事例によって交渉の内容を示しながら、当事者間の社会関係が交渉に及ぼす影響について検討した。また、著者に対する交渉事例から、交渉に臨む人々が事前に対象となるモノの情報を入手している実態を明らかにした。交渉の条件として(1)対象者にアクセスできる社会的関係の存在、(2)対象のモノの特定が必要である。次に社会関係を軸に、何をめぐりどのような交渉が展開したのかを概観し、それぞれの特徴を検討して以下のようなことがわかったとする。

(1) 親戚世帯間では、対象のモノが手元にあれば多少の不便は顧みずに融通しようとする



る傾向がある。(2) 共営世帯はモノの融通相手としてお互いを当てにできるものの、交渉のタイミングが悪い、強引すぎる、本当は自家にもあるのにわざと他家のモノを要求しているとわかるなどの場合には「ない」と言って退けることもある。他方で互いの動静を把握しているため、不用意に「ない」というと「嘘つき」と嘲笑される場合もある。(3) 友人、知人間では共営世帯に比べてモノの動静に詳しくないため「ない」と言って退けることも容易である。したがって、対象者の持つモノの情報をより多く持つ者が交渉を有利に進められる。

続いてサント遊牧民、具体的にはエンヘー家、親戚世帯、共営世帯、その他の世帯と著者との交渉の事例から、対象となるモノや交渉の方法にこれらの世帯の間で著者の所持するモノに関する情報量の格差が影響していることが明らかになった。エンヘー家は最多の情報をもち、親戚世帯、共営世帯は同家から情報の分配があるため、他の世帯との間に生じる格差からエンヘー家に情報の分配を求める圧力を招く。こうした圧力をかわすために(1) エンヘー家や親戚世帯が著者へのアクセス権を分配する、(2) 著者の持つモノの情報の一部を分配するという方法がある。以上から、情報の偏りには意図的に創りだされた部分があり、それはエンヘー家により分配する内容、情報量、発信のタイミングが操作された結果だと著者は述べている。

## 5 モノの情報をめぐる交渉

490

本章では、ゲル＝情報戦の舞台で、遊牧民が他家の情報を収集し、活用する仕方、自家の情報を管理する仕方をエンヘー家における実践から明らかにしている。

著者はモンゴル遊牧民のモノの情報収集の方法には「*sonirkhokh* (興味によるモノ調べ)」、「*ukhakh* (掘り起し)」の二つがあるという。*sonirkhokh* は、ゲルへの来訪者が新奇のモノを手に取り、観察や質問によりモノの情報を得ようとする。*ukhakh* は外からは見えない収納の内容物を暴くことを指す。所有者の同意、許可がある場合にのみ可能で、当事者間の人間関係による。

来訪者のこのような情報収集に対し、モノの所有者は「*dald khiikh* (隠蔽)」「お披露目」「*gaikhuulakh* (見せびらかし)」「陳列」の4つの方法でモノの情報を管理している。「*dald khiikh*」には(1) 情報の秘匿(2) 移動の制限という二つの役割がある。これに対し「お披露目」「*gaikhuulakh* (見せびらかし)」「陳列」は、いずれも意図的な情報発信である。どのゲルも空間構成や家具の配置、モノの位置はほぼ同じで貴重品の収納場所も公然の秘密である。それを承知のうえで上記のような情報収集と交渉による駆け引きを行う。

以上より、著者によるとモノの情報をめぐる交渉について(1) *sonirkhokh* (興味によるモノ調べ)や*ukhakh* (掘り起し)という情報収集行為が社会関係を活用して行われており、収集された情報をもとにモノの要求交渉へ転換していくこと、(2) モノ(情報)の所有者は必要に応じてモノを隠蔽し情報を操作すると同時に、社会関係や社会的立場の維持のために特定のモノの情報をお披露目、*gaikhuulakh* (見せびらかし)、陳列などの方法により発信していること、(3) モノの情報性に着目してみた場合、遊牧民のゲルは交渉の

舞台となること、遊牧民にとってモノの隠蔽による情報の秘匿が最大の防衛手段であり、ゲルの空間構成や収納が彼らの戦術を可能にしていることが明らかになった。

## 終章 交渉する遊牧社会

終章では、第1節で議論の要点をまとめ、第2節ではなぜモノが世帯を超えて移動するのかを遊牧の社会的文脈から考察する。最後に本研究で明らかにしたこととその意義を述べ、モンゴル遊牧社会が情報志向性の強い交渉社会であることを論じている。

本書のモノ研究としての課題のうちモンゴル遊牧民の生活世界において“どのようなモノ”が存在しているのかについては、著者は家族が生活するのに十分なモノを持っていたということを強調する。“どのように”存在しているのかという問いには、モンゴル遊牧民においてはモノが「譲渡か貸借かを曖昧にしたままやり取り」(268)され、「他者の必要に応じて動く」と認識されている(269)といえ、それはモンゴルが交渉によって物事を動かす社会であることによるのだと述べている。著者によると交渉には、状況に応じて人間関係を操作するという働きもある。モノの情報は交渉に際しての分配で当事者間の関係に変化をもたらすうえ、広範囲の人々に分配可能なため、人的・物的資源をより広範・柔軟に取り込むための交換財となりうるのだとも主張する。

著者は本書で、モンゴル遊牧民の生活世界にあるモノを“フロー”及び“情報”として捉えるアプローチによって、彼らの能動的で交渉上手な一面を描き出すことができたと考えている。同時に交渉は地縁や共同体などの感覚のないモンゴル遊牧民を繋ぐ役割も担う。モンゴル遊牧社会が交渉社会であることが、彼らの情報に対する欲求を高めているとも著者は考える。情報を持つ者が交渉に有利なため、情報自体が価値を持ち、情報をめぐる交渉へと展開するためである。

491

以上本書の内容を、議論のハイライトを中心に紹介した。「モンゴル遊牧民のモノの存在を契機に引き起こされる相互行為を通して、遊牧社会の新たな一面を描き出そう」(267)という著者の目的は達成されていると思われる。また、遊牧民のモノが「少ない」＝「物欲が少ない」というのが、幻想であったことを示したことはもちろん、遊牧民にとって「モノが『フロー』である」こと、モノの情報性という着想とともに、ゲルがその空間構成や家財道具の配置自体をそのまま舞台装置とした交渉の舞台であるという指摘、モンゴル遊牧民が日々の暮らしの中で常に五感を駆使して情報収集を行い、交渉にしたたかに活用している様子が示されていることに評者は目を見張った。

この、彼らが常に五感を駆使して情報収集を行い、交渉にしたたかに活用するという事実は、あくまでも評者の感覚ではあるが、やはりモンゴル遊牧民に外部の者が抱きがちな、「自然の厳しさに向き合いつつもゆったり共生する人々」のようなもう一つのイメージが幻想であると示しており、その点も新鮮に感じた。寒暖差の激しい気候の中での暮らしや、人も家畜も体力が衰え食糧も乏しくなる春の厳しさ、夏の搾乳・乳製品加工や家畜管理の手間など牧畜関連労働の厳しさなどを別にすれば、遊牧民の生活は、著者の指摘と

もやや別の意味で「牧歌的」イメージで捉えられがちだったと考えられる。他方で少なくとも本書で明らかにされた遊牧民の姿からは、老若男女を問わず、どこにしようとも五感を通じて自分の周囲で起きている物事や状況を把握し、先を読んで行動しているとみるべきであろう。厳しい自然の中でいかに所有家畜を有効に活用し、無事に越冬させ、繁殖させ、生計を維持するかということを考えれば至極当然なことではあるが、これまでのモンゴル文化に関する多くの記述からは、このような姿は見えていなかったのではないだろうか。

他方でやや気になる点もあった。第4章第2節の共営世帯間の交渉の事例で、著者の目覚まし時計をエンヘー家の共営世帯の子どもが（家人の面前で）持ち去ったことをめぐりやりとり（事例4-16）がある。子どもの仕業でも「取って行くこと自体が交渉であり、無断借用を放置しておくで相手が黙認された」と誤解する可能性がある」（179）ため、エンヘー夫妻が心配して所有者である著者に奪還を促したと、取り返すこと＝移動に応じないという態度を示すこと（＝交渉）だとの記述があるが、これらが「交渉」だとは、評者には少し理解しにくく感じられた。

「交渉」については、序章で「モノの存在が契機となって引き起こされる人々の反応や相互行為を本書では関心の中心に据える」こと、「相互行為とは双方向のやりとりのこと」で、これには「言葉による交渉（非言語による交渉を含む）」（21）が含まれるとの説明がある。また、モノの移動に関する交渉の条件として、「モノの移動は所有者との交渉を経て初めて成立する」（167）こと、「交渉を経ずに他家のモノを勝手に持ち出すことは盗み」（167）であること、「泥棒行為かどうかを判断する基準は、交渉の有無もしくはモノの移動が所有者あるいは周囲の人の面前で行われたかどうかによる」（167）との説明もある。以上から、上記の「家人の面前でモノを持ち去ること」も「交渉」だと理解すべきなのであるが、もう少し明確な「交渉」の定義があれば、より理解しやすいように思われた。

また、大筋の議論に影響のない些細なことではあるが、表現の訳に気になるものがあった。一つは、目覚まし時計、ナイフ、タライなどを「かわいい」と形容している事例が見られることで、おそらくモンゴル語で *khöörkhön* という表現だと推測する。この語は確かに日本語の「かわいい」に相当する意味もあるのだが、*Mongolian – English Dictionary* (Charles Bawden 1997) では “nice, attractive, appealing”、とあり、モンゴル語の辞典 *Oyuun biligiin melmiig neegch ayalguu saikhan mongol ügiin degeji* (I.Dambajav, D.Altanod, D.Solongo 2006) によると “*saikhan* (美しい), *tseverkhen* (こぎれいな), *goyomsog* (おしゃれな、見栄えのよい)” とある。現物を見なければ判断がつかないうえに、その語で形容した人の主観にもよるかもしれないが「素敵な、ナイスな、おしゃれな、小粋な、見栄えのよい (デザイン)」などの訳語の方が適切な場合もあるように思われる。

いま一つ、第4章のMの三番目の兄Lの息子L3が発言した「乞いたいモノがあるんだけど」（事例4-11）は *tanaas neg yum guimaar байна* という表現だと推測され、この推測が正しければ、「お願いがあるんだけど」と訳するのが適切だと思われる。

評者自身は本書で示されるモンゴル社会でのモノの「移ろいやすさ」から90年代に中



国・新疆ウイグル自治区ホボクサイリモンゴル族自治県で見た出来事を想起した。それは、ある女性が結婚祝いに贈られた腕輪を義母に「これは質が良くない。後でよその家の娘にあげてしまいなさい」といわれたこと、贈り物の服を夫の実家に置いていったところ、不要だからそうしたとみなされ、翌年その服を「質が悪いから」と他の親族への贈り物にするようにいわれたことがあった。これらは、評者が不勉強で解決すべき疑問としてきちんと追究しなかったからでもあるが、特に理解できかねる現象だった。「モノが『フロー』」であり、他者の必要に応じて動くものだからというのが答えになるのだろうが、「質が悪いから」という説明や他の事例と併せて、もう一度考えてみたい。

また、「交渉社会」ということから、一見それに反するかのような事例として、民主化直後（1990年夏）のモンゴルを評者が訪れた際、首都の土産物店で旅行客に商品の値引き交渉を始められた店員が非常に困惑していた場面を想起する。ただし、評者の見た場面の店員は、「ポスト社会主義期」の都市で働いていたので「価格」の交渉には疎遠で不慣れだった、と解釈すべきことなのだろう。むしろ、評者の2003年からの数年間のモンゴル滞在でも（本書にも類例があるが）、古本市などで商品の価格に難色を示すと「*yarikh uu?*（話そうか＝交渉できるよ）」ともちかけられたり、応じるのが難しい要求を「とりあえず言ってみて（こちらの）出方を窺われ」たり、ということは日常的だった。13世紀の旅行記に描かれたモンゴル人の姿（本書終章）からも、彼らが様々な物事を交渉で動かそうとする人々であるという指摘は妥当だと思われ、上記の出来事が「例外的」なのだろう。

著者自身は今後の課題として「日常生活全般を覆う情報活動の全容解明」を挙げており、そのことももちろん期待するが、現代モンゴルの人口の大半は都市住民が占めることから、そのような生活環境や条件の違いによる影響についても知りたいと評者は考えている。

#### <参考文献>

- 一ノ瀬恵 1991 『モンゴルに暮らす』 岩波書店。
- チクセントミハイ、ミハイ&ユージン・ロックバーク＝ハルトン 2009 『モノの意味——大切な物の心理学』 市川孝一・川浦康至訳、誠信書房。
- 風戸真理 2010 「モンゴル牧畜社会における銀製品——その経済的な価値と文化的な価値」 *Kyoto Working Papers on Area Studies*, No.87, JSPS Global COE Program Series 85 *In Search of sustainable Humanosphere in Asia and Africa*.
- 2016a 「現代モンゴル国における贈与——ゲルとその部品のバイオグラフィーより」 岸上伸啓編『贈与論再考』 臨川書店、pp.238-260。
- 2016b 「世帯の発展サイクルとともに伸縮する住居『ゲル』」 サンプルドンドウ・チョローン・胡日査・アンドリアン ボリソフ・岡洋樹編『ユーラシアの遊牧歴史・文化・環境』（東北大学東北アジア研究センター報告 22）東北大学東北アジア研究センター、pp.229-239。
- 堀田あゆみ 2012 「モノに執着しないという幻想——モンゴルの遊牧世界におけるモノ

- をめぐる攻防」『総研大文化科学研究』8:117-135。
- 2015 (博士学位論文)「モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌」総合研究大学院大学文化科学研究科に提出。
- 2016 「モノの流通と消費にみるモンゴル遊牧民の生存戦略」風戸真理・尾崎孝宏・高倉浩樹編『モンゴル牧畜社会をめぐるモノの生産・流通・消費』(東北アジア研究センター叢書第58号)東北大学東北アジア研究センター、pp.131-159。
- Kopytoff, Igor 1986 The Cultural Biography of Things: Commoditization as Process. In Arjun Appadurai ed. *The Social Life of Things: Commodities in Cultural Perspective*. New York: Cambridge University Press, pp.64-91.